

〔目的〕乳児の糞便内菌叢は栄養法によつて著明に異なる。とくに母乳栄養児の糞便内菌叢の大部分を *Bifidobacterium Bifidum* (以下ビフィダス菌・ビ菌) が占めることは周知の事実であり、母乳内のビフィダス因子も多くの研究者によつて解明されつつある。また離乳期の乳幼児の糞便内菌叢に変動を及ぼす因子としては食餌組成、腸管内pH、腸管機能、小腸における食物の消化吸収状態があげられる。特に乳汁から普通食餌に移行する離乳児の場合糞便内菌叢は顕著に変動するといわれている。本研究はその変動とビフィダス菌の動向に就いて長期間にわたって観察し、離乳食の一部を玄米ミールを投与したことと、有意の関連があるかを確かめてみた。

〔方法〕研究対象、離乳食期間の女児を生後194日目から離乳食終了後の435日目までの間、10次にわたって系統的に採便し観察した。その間対象児の他に、ビ菌ミルク投与児一例と、普通投与児一例を対照とした。試料は朝の第一回排便を採取し、排便後1~2時間以内に検査した。検出細菌群は総菌数・乳酸菌群・腸内細菌(大腸菌群・レンサ球菌群・ブドウ球菌群・直菌群)である。培地はフランクミート培地・CTJ寒天培地・DHL寒天培地・SF寒天培地などを用い、希釈用には希釈用培地を作り、乳酸菌群は嫌氣的状態で37°C・48時間培養し、組はすべて好氣的条件下で37°C・24~48時間培養した。

〔結果〕ビ菌は離乳食初期に10<sup>9</sup>台であったが、後期の289日以降は減少し10<sup>7</sup>台を来し、終了後の435日目まで10<sup>9</sup>台を維持した。対照児においても検出菌の動向は大きな差はなかったが、対象児はビ菌ミルク飲用は皆無であったが、投与児のビ菌検出率に差はなかった。